

報告3 『漢并天下
海内率服』——新疆ウイグル自治区奇台县石城子遺
跡の発掘と研究——(国際シンポジウム
中国都城考古学の最前線3
——秦漢都城と周縁域都市・城塞の考古学的新進展
——)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田, 小紅, 佐川, 正敏 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000313

報告3 『漢并天下 海内率服』 —新疆ウイグル自治区奇台县石城子遺跡の発掘と研究—

田 小紅（新疆ウイグル自治区考古研究所・副研究員）

1. 石城子遺跡の発掘と発見

紀元前60年に匈奴の日逐王は前漢に投降し、漢王朝は西域に西域都督府を設置した。「漢の号令西域を班するかな」、西域は正式に漢王朝の政治的版図に組み入れられた。辺境防備を強化し、シルクロードの滞りない交通を保障するために、漢王朝は西域に軍事防衛システムを構築した。まさに石城子遺跡は、防衛システム中の軍事要塞の1つであった。

（1）石城子遺跡の位置と発掘の経緯

石城子遺跡は、新疆ウイグル自治区昌吉回族自治州奇台县半截溝鎮麻溝村の北東1.4km、奇台县城から南へ55kmのところに位置する。この地は、天山山脈北麓の丘陵地帯にあたり、北は奇台やジムサルなどのオアシスへ通じ、南は天山を通り抜けてトルファン盆地へ至る。『西州図経』には、烏骨道と薩捍道の二道という天山の南北を繋ぐ道路が、石城子遺跡付近を経由していたことが記述されている。遺跡の北面は急な坂になっており、東面と南面には深い谷があり、ただ西辺だけが麻溝梁の斜面の畑と繋がっており、地形は平坦である（図1）。



図1 遺跡全景と天山山脈（北西→南東）

新疆文物考古研究所は、2014～2019年に石城子遺跡で5回にわたって考古学的発掘を実施し、発掘面積は3200㎡で、出土遺物は2000余点であった^{1) 2) 3)}。遺跡の東側は城跡区で、西側は手工業工房区と墓域である。城跡は内外二重構造である。外城の平面はほぼ長方形で、面積は約1.1万㎡であり、北面と西面に城壁を構築し、東面と南面は深い谷を障壁とし、谷底の麻溝河は南から北へ流れて城の東を巡りながら通過する。内城は外城の西・北面城壁を利用して建設したもので、面積は約2万㎡で、東面城壁がまだ残存し、南面城壁はすでに耕作で削平された。全城内の最高地点は北東隅にあり、麻溝河との比高差は220mに達する。

(2) 石城子遺跡の城壁と城門

城壁は版築工法で構築され、基底は斜面保護の方法 (slope protection methods) で補強している。これは『塩鉄論・未通編』に記述された「築城する者は先ずその基を厚くし而して後その高さを求む」の城郭モデルに符合する (図2)。

城門は一基だけであり、西面城壁の中部に建てられた。軍事防御における城門は、城壁と堀による守備においてもっとも薄弱な部分であるので、単一成門は城壁と堀の建設の理想的配置である。石城子遺跡の東面と南面は天険の地であり、北面は匈奴人が南下し侵攻して来る方向であるので、西辺にだけ城門を一基建設し、強烈な防守態勢を具体的に示したのである。城門の南北両側の城壁はずれてZ字形を呈し、南側の城壁は外側に、北側の城壁は内側に偏っており、城門寄りのところは外側へ変化して南側の城壁と平行に揃う。



図2 北西角楼と城壁 (北→南)

城門には二回増築の過程があり、それは主として門道、墩台、回廊、散水、そして門塾などの複数の部分から構成されている (図3)。門道の軸線は東西方向で、長さ13m、幅4mである。楼蘭地区のLK古城の城門も幅3.8mである⁴⁾。北魏代の洛陽城の建春門は一門三道で、そのうち南・北道の車輻幅も4m前後である⁵⁾。したがって、われわれは漢魏代の都市における単門道の幅がおそらく4m前後で、これは当時の都市の建築制度に符合するだろうと推測している。門道の両側の版築城壁寄りにはそれぞれ排叉柱を10本差し込んで立て、排叉柱の間には日干しレンガを挟め混んで積み重ねていた。現在、門道の両側の壁面上には5層の藁混じり泥土と10層の漆喰が部分的に残されており、繰り返し塗装した痕跡が十分に明らかである。これらの版築壁と排叉柱は門道の両側の壁を構成していただけでなく、さらに門道の天井部と門楼の荷重を支えていた。門扉は門道の中西部に位置し、木製の敷居と軸刷りがあり、敷居の両端には軸刷木を置き、その上に門扉の框部を差し込んでいた。その框部の痕跡がわずかに残されている。その痕跡から、両開き扉の構造であったと判断される。門道内には多くの藁混じり泥土塊が残されており、藁混じり泥土塊の背面には配列が規則正しい弧形の木柱の痕跡があるので、まさに門道の天井部から脱落したものである。城門内部の瓦片の堆積の厚さと一部分の住居が城壁中に建てられていた状況によれば、門道の上部には門楼が存在したはずであると推定される。



図3 城門の発掘区 (南→北)

門道の南北両側には、それぞれ回廊があった。回廊は城壁上に建てられ、北回廊の南東隅には4段の階段があり、また各階には木製板をL字形に平坦に敷いて

おり、その縁辺は赤色の線を塗って装飾している(図4)。回廊を通して、城門楼へ行き来できただけでなく、城門楼とともに立体交差的に防護をなすことができた。つまり、回廊の壁の射撃孔を通して城壁の角のところに接近する目標の敵を射殺することができる、非常に巧妙で独創性をもった建築方式である。城門上には、さらに門塾などの敵情を観察することに便利な見張り用の施設が加えて建てられている。門塾は6棟発見され、いずれも壁の基礎だけが残存し、相互に繋がってはいなかった。以上、城門は版築城壁と排叉柱によって支えられた大梁式単門道で、城門楼と回廊をもつ構造であったと、今のところ判断する。



図4 城門発掘区内の北回廊で見つかった階段(南→北)

このほかに、外城の北西隅と北東隅の城壁上にはそれぞれ角楼が1棟ずつあり、角楼の外側の壁体には部分的に瓦の破片を貼り付けたり積み上げたりしている。このことは、壁体が頻繁に破壊されていたので、緊急に瓦の破片を使って壁体を強化し、保護するほかなかったことを暗示している。つぎに、北面城壁には馬面2基が対称位置にあり、死角なしに敵軍を射殺できた。さらに、城外10mのところには外堀(護城壕)を掘り、それによって騎兵の進攻を阻止していた(図5)。城門、城壁、角楼、馬面、門塾、外堀は、みな城の安全防衛を強化するために造営された軍事施設である。そして、これらは敵を警戒し監視する役割をもち、城壁を主体とし、外堀と融合して一体となった環状の工事体系を構成していた。



図5 堀(護城壕)(南→北)

ボーリング調査によって発見された遺構は主として内城に集中し、外城に残存した遺構は少ない。内城の遺構は主として住居建物であり、住居は計37室検出され、一部には壁の基礎が残存し、主として生活用の住居であった。住居は地形によって梯子状の配置をする排房式(部屋を並べた形式)の建築構造で、住居の間は小路で繋がっていた(図6)。構築方式には地上式と半地下式の二種類がある。地上式は旧地表面に整地し平坦にして叩き締めた後に建てており、半地下式は減地法を利用してその北壁を台地の傾斜面の高い方にし、下方へ向かって掘り、南側は壁立ちにする。その壁体は、日干しレンガが版築で積み重ね、壁面には藁混じり泥土を塗り、さらにその上に漆喰を塗り、そして壁面の下辺と角に赤色の線を描いているので、本遺跡の等級の高さを示す質的特徴が反映している。住居の出入口は南側を向いており、木製の敷居がある。一部分の住居の北東隅にはカマドなどの生活の痕跡があった。住居内の床面には崩落した大量の瓦の破片が残存し、その中には土器片や赤焼土塊、木炭、灰などが混じっているので、城跡は最後に火災が原因で廃棄されたことが明らかである。



図6 内城北西部の住居跡(南→北)

(3) 出土遺物

城内から出土した遺物には、建築材料（図7）、生産用具、生活用具、兵器、五銖銭（図8）などが含まれている。

建築材料が主であり、新疆地区で目下唯一大量に漢代の瓦埴が出土した遺跡である。軒丸瓦の瓦当面は、半球形の内区を中心として外区は四区画に区分され、それぞれの区画内に雲文か変形雲文が対称位置に飾られる。また、少数の瓦当面には幾何学文だけが飾られている。瓦当面には白色を塗ってからさらに赤色顔料を塗っており、白色顔料は白亜であり、赤色顔料は辰砂である。瓦当の形状は規則的で、図案は構想が巧みである（図9）。



図7 城跡内発見の平・丸瓦および軒丸瓦の組み合わせ復原



図8 城跡内出土の五銖銭



図9 城跡内出土の軒丸瓦

生産・生活用具には、甕、鉢、高坏、浅鉢、甑、土製臼、土製紡錘車、土製蓋、石臼、研磨具、埋木製虎飾（図10）などが含まれており、多くが無文である。一部の遺物の表面には「宋直甕」、「馬」、「十」などの隸書漢字が刻まれており、その中で「馬」の字の書き方は洒脱で美しい（図11）。兵器には、矢、刀、栓銷、結具、鎧小札がある。栓銷は弩機の部品であり、弩機は射程距離の長い射殺性のある武器である。

漢代の武器の製造技術と管理モデルはすでに非常に先進的であり、これらの武器は石城子遺跡の濃厚な軍事的役割を突出して表している。



図10 城跡で地表採集された埋木製虎飾



図11 城跡内出土の土器片(表面に「馬」字の篋書きあり)

(4) 石城子遺跡の窯跡と墓

窯跡は馬蹄形窯であり、作業場、焚口、燃燒部、焼成部、煙道の5つの部分から構成されている。焼成部から出土した建築材料(軒丸瓦など)は、城内の同類の遺物と同様であり、したがって城内の建築材料はここで製作されたと判断される。馬蹄形窯跡は比較的流行した瓦陶窯の構造であり、新疆地区の魏晋代と唐代の瓦陶窯でよく見られるものであり⁶⁾、中原地区においても非常に普遍的であった⁷⁾(図12)。



図12 窯跡と墓の分布(西→東)

墓の分布は、多くが散在し、一部が集中する特色をもっている。墓は、その形状と構造によって竖穴土坑墓と竖穴二層台墓(図13)、竖穴偏室墓に区分できる。葬具には槽形棺と箱式棺があり、葬法はすべて単人仰臥伸展一次葬である。一部の被葬者の身体の片側には、羊頭と肢骨が副葬されていた。出土遺物には、土器、金属器、骨器、ガラス器、五銖銭などがある。このうち2点の土器は、内モンゴル商都県の東大井墓地で出土した土器およびホロンブイルの団結墓地⁸⁾で採集された土器と、器形と文様が非常に類似しているため、おそらく鮮卑族が残したものであろう(図14)。金属器とガラス器は装飾品と生活用具であり、骨器は大部分が羊の四肢骨製である。この羊の四肢骨、そして羊頭を被葬者が副葬した方式は、羊が日常の経済生活において不可欠な価値をもっていたことを暗示している。墓の年代は二段階あり、1つは両漢代であり、もう1つは魏晋南北朝代であり、城跡との関係が密接である。



図13 竖穴二層台墓(M2)



図14 竖穴土坑墓(M4)出土の罐

2. 石城子城跡と漢代西域の軍事情勢

両漢代の匈奴は、ずっと漢王朝の心中の大きな憂いであったが、60～70年間の休戦と人口増加を経て、国家の実力はすでに匈奴に対抗するのに十分となったので、武帝は匈奴に対して軍事的進攻を發動した。いろいろな時代の軍事情勢の変化によって、周縁地域にある集落への軍隊の駐屯を調整した。たとえば、新疆⁹⁾、内モンゴル^{10) 11)}、甘肅¹²⁾などの地では、軍事的必要性によって、烽火台と国境の都市が建設された。『漢書・武帝紀』注師古に曰く、「漢は常に塞の要所を制し別ちて築き城となす。人を置きて鎮守し、之れを候城と謂う、即ち此れ障なり。」山川險要の地と戦略配備の重要な要衝上には、軍事的要塞を構築した。石城子遺跡は地形に則して長方形を呈し、内・外城の構造をもち、壁体を版築で築く、このような構築方式は漢代の城郭の建築制度に符合する^{13) 14) 15)}。中心的建物跡で漢代の瓦磚が大量に使用され、表面に隸書の漢字が刻まれた土器や武器などが使用されていたことは、すべてこの古城跡が両漢代における軍事・政治的施設の設置を明示しており、城跡の建物構築方法、建物に係る等級や規模、遺物の組合せの特徴などは、この城跡が漢代の天山山脈以北に設立された軍事的要塞であることを明確に表している。軍隊の編成上、漢代の国境付近の郡の軍事的建物の規模や外観は厳格に遵守され、建物の構造と機能は北方の軍鎮の特徴を多くの点で具体的に示しており、漢王朝が西域経略のために設置した重要な軍鎮である。建物の等級に厳格な漢代において、国境付近の郡城の防衛施設の建設の方法と制度は、特別な要求が必ずあったはずである。「・・・前漢代では、国境付近の郡の烽火台、土壘、高官の政庁、都尉の邸宅、関所の要塞などの施設には、その設置、大きさ、規模外観において等級の差と制度が存在した。」¹⁶⁾ 石城子遺跡は、山の形状と水の流れによって造営され、城壁と堀の尺寸は漢尺（1尺=0.23m）によればほぼ160丈×120丈であり、前漢代の軍事施設の造営の規模に符合することからも、まさに西域の国境付近の郡の要塞に相応する。

その具体的な造営時間については、ほぼ漢元帝（前48～前33年に在位）が前48年に戊己校尉を置いた後、匈奴の勢力は大きく衰退し、中原王朝は天山山脈南麓のトルファン盆地に対してすでに実際の支配権をもっていた。したがって、天山北麓に防衛の兵力を配置することがようやく可能となったが、後漢代には中原内地と西域は「三絶三通」の不安定な関係となり、これに後漢代末期の農民蜂起が加わって、中央政府はすでに西域の経営をする力を失い、それ以前に構築された防衛システムはすでに再び効果を発揮する術を失った。石城子遺跡に類似したような国境付近の城も、自然に廃棄された。

このほかに、漢軍は毎回大規模な軍事行動において、「中国は道を繕い糧を送る、遠くは三千、近くは千余里、皆給を大農に仰ぐ。」¹⁷⁾ 必要な軍用物資の補給には、多くの人力と物力、財力を動員する必要があり、かつ長距離輸送の代価も非常に高く、漢王朝の辺境地域の拡大がますます遠くなるにしたがって、内地から銭と食糧を輸送する距離もますます長くなった。したがって、前漢王朝はその成果を確固たるものにし、西域の政治的情勢を安定させるために、政府は計画的な屯田を組織し始めた。漢王朝は大宛を伐って勝利した後に、輪台と渠犂に屯田し、同時に「使者校尉領護」を置き、その後さらに戊己校尉を設置して西域の屯田の事務を主管させた。「戊己校尉は、元帝初元元年に置く、丞、司馬各一人、候五人有り、秩比六百石。」¹⁸⁾ その治所は交河にあって、後に高昌壁に移転した。戊己校尉は兵官または屯田官を管轄し^{19) 20) 21)}、戊己校尉と西域都護の設置は「西域都護が西域を全体的に管轄し、同時に絲綢南北二道を保護し、そして戊己校尉が車師を専ら管轄しながら、絲綢北路を独自に保護する仕組みを形成した。」²²⁾ 西域の屯田は、物資の長距離輸送の費用を解決し、駐留する兵卒の兵糧を保障するだけでなく、漢軍の戦闘力を大いに強化し、平時は生産、戦時は抗戦という両方をしっかりと行い、「兵は中国を費やすべからず而して軍用足る」の効果を達成し、巨大な経済的補助作用を発揮した。

石城子遺跡内の土壌と食物残留物に対する検査測定分析によって、両漢代の現地の気候は現在よりも温暖湿潤で、主たる農作物はハダカムギとコムギであったことが判った。優越した自然環境と良好な自然環境は、屯田耕作の基盤を保障するものであり、将兵たちは半兵半農で、軍事攻防と関連する生産活動に従事し、平時の生産と戦時の必要性が緊密に結合していた。遺跡内から出土した石皿、石臼、土器、そして墓に副葬された農具の痕跡は、ともに屯田の特質を明瞭に示している。そして、ここは両漢代の戊己校

尉が駐屯した城の1つであり、かつ遺跡の廃絶も戊己校尉の設置と関係している。

3. 石城子遺跡と疏弥城説の検討

石城子遺跡が漢代の「疏弥城」であったか否かについては、学界で何度も検討されてきた。それは主として以下の2つの見解にまとめられる。

第一の見解では、「疏弥城」の旧跡と考えられているのが、吉木薩爾県の東大龍口遺跡である。孟凡人氏は、「泉子街以南と頭道橋の間の西側の台地上には古城跡が1つあり、……。本古城位置は『後漢書・耿恭伝』の記述に基本的に符合する。したがって、この古城の前身（古城の継続使用時間は長いようである）はおそらく疏弥城の所在地であろう。」²³⁾

第二の見解では、「疏弥城」の旧跡と考えられているのが、すなわち現在の奇台县石城子遺跡である。薛宗正^{24) 25) 26)}、魏大林²⁷⁾、王炳華²⁸⁾、戴良佐^{29) 30)}、蘇北海³¹⁾、楊鎌³²⁾などの各氏の見解である。

石城子遺跡の地理的位置、自然環境及び考古学的発掘資料、年代測定などの分野の総合的分析によって、われわれは石城子遺跡が『後漢書』に記載された漢軍が天山北麓で進駐防備した「疏弥城」の特徴と相符号すると考える。石城子遺跡が「疏弥城」の旧跡であるとするのは、主として以下の三点に基づいている。

- ① 石城子遺跡は崖の上に建てられ、同時に地形の険しい自然の要害を防壁とし、地形が高いので、守り易く攻めにくい。都市の防衛システムにおいて、晁錯は以下の3つの重要な面があると考えた。「戦いに臨み刃を合わせるの急なるは三なり：一に曰く地形を得る、二に曰く卒は服習す、三に曰く器は力を用いる。」³³⁾ 地形の険しさはもっとも肝心の要素である。『墨子』の『備城門』編において、墨子も同様の見解を提示し、「城を守る者の考慮はすみやかに敵を傷つけるを以て上となす」と考えている。その意味は、地形を利用し、城壁と堀を頼りとし、正確に兵力を手配して、頑強な堅守と適時の出撃を相結合させることである。したがって、古代の辺境に郡の城塞を設置する場合、多くは地形の険しさによって設置し、あるいは隙間のない堅守の状態にするのが容易で攻撃が難しい場所に構築し、あるいは交通の要衝である狭隘な喉元に設置したのであった。石城子遺跡の造営は、「地形を得る」という戦術を考慮することと十分符合するのである。谷底の麻溝河は、『後漢書』に記載された「恭以う疏弥城の旁らに澗水有り、固かるべし」というこの重要な記述を相例証するものであり、これは石城子遺跡が漢代の疏弥城であったということを確定する一番重要な要素である。
- ② 石城子遺跡は、天山南北を往来する交通の関隘の地を押さえており、これは漢王朝の防衛システムにおいて鍵となる一環であった。石城子遺跡は天山北麓に位置しており、南に向かって天山を越えるとその地域の道路があり、烏骨道、薩捍道、移摩道などの多くの道路は相互に連絡することができた。天山東部のボグダ山南麓のトルファン盆地の位置は非常に重要であり、トルファン盆地は「気候が温暖で、コムギが1年で再び実った。」³⁴⁾ 車師前・後部は、天山の南北を往来する交通の要であっただけでなく、漢王朝の中道と北道が西の西域へ向かう際に必ず通らなければならない地でもあり、車師を争奪することは漢王朝と匈奴にとって重要な意義をもっていた。「まさに漢王朝の勢力が大きいときには、しばしば烏壘（現在の新疆輪台）やキジ（現在の新疆クチャ）を進軍し占拠して、西方を支配した。勢力が衰退するときでも、高昌を保有しようとし、河西の障壁とした。」³⁵⁾ 武帝元封年間から派兵して車師の攻撃が開始され、宣帝地節年間まで漢と匈奴の間では車師の争奪が幾度も繰り広げられ、「五争車師」の戦役は40年近い時間継続した。戦争が膠着した段階においては、(紀元前68年に)鄭吉は校尉司馬の熹就と糧秣を集めて蓄え、車師を攻撃する準備をし、秋の収穫時になって兵を發して交河城を攻め破った。西域都護が設置された後は、屯田の重点は輪台と渠犂からトルファン盆地と天山北麓へ移動した。したがって、漢の地方制度により天山北路に軍事上の防衛線を構築して、匈奴人の鉄騎を阻止したので、石城子遺跡はすなわち匈奴人が天山へ南下しトルファン盆地へ至る狭隘な道を塞ぐ障壁であった。
- ③ 耿恭は金満城に駐屯した後、「烏孫に檄を移し、漢の威徳を示す。」金満城は疏弥城と距離が近く、

後漢明帝は金満城を戊校尉の治所とし、疏弥城は金満城の片翼として金満城を保護した。疏弥城は天山以南の柳中城と多くの道路で結ばれており、柳中城は東へ向かって敦煌に到達でき、中原との連絡も便利であり、その地理的位置は進んで攻めることもでき、退いて守ることもできた。したがって、紀元75年に金満城が匈奴と車師に包囲され攻撃に見舞われた後に、耿恭はまず疏弥城を選んで退守の拠点とすることを考慮の1つとした。「疏弥城防衛戦」については『後漢書・耿弇列伝』中で以下のように比較的詳細に記述されている。「恭は疏弥城の旁らに有る澗水を以て固めるべし、五月、乃ち兵を引きここに拠す、匈奴また来たりて恭を攻め、恭は募りて先ず数千人を登し直ぐにここに馳せる、胡騎散走し、匈奴遂に城下において澗水を擁絶す。恭は城中において井十五丈を穿つも水を得ず、吏士渴乏し、馬の糞汁を笮してこれを飲む。恭仰ぎ嘆きて曰く：「昔聞く二師將軍佩刀を抜き山に刺す、飛泉涌出す；今漢の徳は神明なり、豈窮すること有りや。」乃ち衣服を整え井に向かって再び拜し、吏士のために禱る。頃く有りて、水泉奔出し、衆皆萬歳を称す。乃ち吏士をして揚水し以て虜に示しむ。虜不意を出ず、以て神明となし、遂に引き去る。」引用した文中に提示された「恭は城中において井十五丈を穿つも水を得ず」について、「麻溝梁の基底部分は堅い岩盤であるが、井戸を削りぬいて水を取ることは、少しは可能である」と考える研究者もいる³⁶⁾。また、「奇台县のある幹部が水利工程師に対して助言を求めたところによれば、高山の地層下の岩石の間隙には泉水が貯まっているところがあるので、石城子のような山地に井戸を掘って水を得ることは完全に可能である。」³⁷⁾、そして石城子遺跡の場所は天山山脈の山麓地帯であるので、「天山山脈は山体が高く大きいので、かなり豊富な降水量があり、河川の水源地補給区となっている。」³⁸⁾と考える研究者もいる。したがって、石城子遺跡内に「井戸を穿つ」ことも完全に可能なことであり、ボーリング調査のデータと合わせてもこの推論の実行の可能性を実証した。

紀元前138年に張騫は西域に使節として出向き、月氏と連絡を取るために、「匈奴の右腕を断たん」と欲した。紀元前127年に衛青は軍を率いて匈奴を攻撃し、オルドス以南の地区を占領した。紀元前121年に匈奴の渾邪王と休屠王は前漢に降伏し、漢王朝は河西回廊に四郡を設置し、亭・障（烽火台）を列して玉門に至り、西域までの道路を通じさせた。紀元前119年に霍去病は匈奴を攻撃し、決定的な勝利を得て、「漠南無王庭」を派遣し、この時から匈奴は勢力を弱め、この種の有利な局面下で、張騫は再度烏孫へ使者として出向いた。漢王朝の西域に対する苦心した経営を通して、「今西域の諸国、・・・向下せざる莫く、大小欣欣、貢奉すること絶えず。」³⁹⁾西域の「商胡販客、日に塞下に款す。」⁴⁰⁾こうして、西域諸国の各地方政権は「東に向かいて天子に朝す」、「咸内属を楽しむ」、漢王朝の名声と権威が遠方まで広がり、国勢は頂点に達した。

敦煌の懸泉置出土の漢簡には、伊循城都尉（V92DXT1312③：6）、車師已校、伊循田臣（V92DXT1310③：67）、将田車師已校尉、戊校尉、右部司馬丞（II90DXT0215②：21）、使都護西域騎都尉（II98DYT1：33）、鴻嘉四年五月丙申朔乙卯敦煌玉門都尉君丞敢言之府記（II98DYT2：11）、使送北道諸国客副衛候玄所将烏孫諸国（II98DYT2：35）、奏曹言 写下将田車師戊已校尉詣田所詔書下玉門関候正月辛未史長富奏封（II98DYT5：1）⁴³⁾などがあり、新疆高昌故城でもかつて1/4の雲文軒丸瓦の破片が採集された⁴³⁾。これらはともに両漢代に西域都護を設立したことを顕彰した後に、「都護は烏孫、康居等三十六国の動静を督察し、変有れば以て聞く、安輯なるべし、これを安輯し、可からざる者はこれを誅伐す。」⁴⁴⁾の輝かしい歴史であり、漢并天下、海内率服の重要な裏付けである。

注

- 1) 新疆文物考古研究所：《2014年度奇台县石城子遗址考古发掘报告》，《新疆文物》，2015年3—4期。
- 2) 新疆文物考古研究所：《新疆奇台县石城子遗址2016年发掘简报》，《文物》，2018年第5期。
- 3) 新疆文物考古研究所：《2017年度奇台县石城子遗址考古发掘报告》，《新疆文物》，2018年第1—2期。
- 4) 新疆文物考古研究所：《2016年楼兰考古报告（上）》，《新疆文物》，2017年第3期；《2016年楼兰考古报告（下）》，《新疆文物》，2017年第4期。
- 5) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城工作队：《漢魏洛陽城北魏建春門遗址的发掘》，《考古》，1988年第9期。
- 6) 新疆文物考古研究所：《1988—1997年度民丰县尼雅遗址考古调查简报》，《新疆文物》，2014.3—4合刊；《高昌故城第三次考古发掘报告》，《新疆文物》，2011.2
- 7) 中国社会科学院考古研究所漢城隊《漢長安城窯址发掘报告》，《考古学报》，1994年第1期。
- 8) 魏堅主編，內蒙古自治区文物考古研究所編：《內蒙古地区鮮卑墓葬的發現与研究》，科学出版社，2004年。
- 9) 新疆維吾爾自治区文物局編：《新疆維吾爾自治区第三次全国文物普查成果集成（新疆古城遗址）》，科学出版社，2011年。
- 10) 王大方：《漢鵝鹿塞考古》，《中国文物报》，2020年2月7日第7版。
- 11) 甄自明 岳明：《鄂爾多斯漢代城址浅析》，《草原文物》，2015年第1期。
- 12) 李并成：《漢居延渠城新考》，《考古》，1998年第5期。
- 13) 何昊：《甘青寧地区漢代城址研究》，吉林大学硕士学位论文。
- 14) 周長山：《漢代的城郭》，《考古与文物》，2003年第2期。
- 15) 劉慶柱：《漢代地方城址的考古發現与研究》，《古代都城与帝陵考古研究》，科学出版社，2000年。
- 16) 于志勇：《西漢時期樓蘭“伊循城”地望考》，《西部考古》第七輯，2013年00期。
- 17) 《漢書·食貨志第四下》。
- 18) 《漢書·百官公卿表第七上》。
- 19) 王素：《高昌戊己校尉的設置—高昌戊己校尉系列研究之一》，《新疆師範大學學報》（哲学社会科学版），2005年9月第26卷，第3期。
- 20) 王素：《高昌戊己校尉的設置—高昌戊己校尉系列研究之二》，《中国历史文物》，2005年第4期。
- 21) 余太山：《兩漢西域戊己校尉考》，《史林》，1994年第1期。
- 22) 王素：《高昌戊己校尉的設置—高昌戊己校尉系列研究之一》，《新疆師範大學學報》（哲学社会科学版），2005年第3期。
- 23) 孟凡人：《車師后部史研究》，《北庭史地研究》，新疆人民出版社，1985年。
- 24) 薛宗正：《金蒲、疏勒、務涂谷考》，《新疆文物》，1988年第2期。
- 25) 薛宗正：《耿恭駐守的疏勒城在哪里？—兼与才家瑞同志商榷》，《图書評介》，1979年第4期。
- 26) 奇台县文化館（薛宗正執筆）：《新疆奇台境內的漢、唐遗址調查》，《考古学集刊》第5集，中国社会科学出版社，1987年2月第1版。
- 27) 魏大林：《疏勒城考辨》，載《西部学刊》1987年第3期。
- 28) 王炳華：《天山東段考古調查紀行》，《新疆文物》1988年第1期。
- 29) 戴良佐：《奇台麻溝梁石城子遗址踏勘記—兼論耿恭駐守的疏勒城方位》，《新疆文物》1992年第1期。
- 30) 戴良佐：《新疆奇台石城子遗址漢疏勒城今地之爭》，《中国边疆史地研究》，1995年第12期。
- 31) 蘇北海：《疏勒名称考》，《新疆大學學報》（哲学社会科学版），1984年第3期。
- 32) 楊謙：《絲綢之路的地標—疏勒城》，《文史知識》，2015年第8期。
- 33) 《漢書·爰盎晁錯傳》。
- 34) 《北史》卷九十七。
- 35) 陳連慶：《東漢的屯田制》，《東北師範大學科學集刊》，2014年。
- 36) 王炳華：《天山東段考古調查紀行（二）》，《新疆文物》，1988年第1期。
- 37) 戴良佐：《新疆奇台石城子遗址漢疏勒城今地之爭》，《中国边疆史地研究·探索与交流》1994年第4期。
- 38) 林瑞棠：《天山南坡降水、径流的垂直地带性特征》，《水文》，1985年第2期。
- 39) 《後漢書·班超傳》。
- 40) 《後漢書·西域傳》。
- 41) 張德芳：《從懸泉漢簡看兩漢西域屯田及其意義》，《敦煌研究》，2001年第3期。
- 42) 張德芳、石明秀主編，敦煌市博物館、甘肅簡牘博物館、陝西師範大學人文社會科學高等研究院編：《玉門閔簡簡》，中西書局，2019年。
- 43) 遺物は新疆文物考古研究所に現存する。
- 44) 《資治通鑑》卷二十六。

翻譯：佐川 正敏（東北學院大學・教授）